
トラウマと四番バッター

どらぐーん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラウマと四番バッター

【Nコード】

N2186BA

【作者名】

どらぐーん

【あらすじ】

23歳で無職でついてない男の谷重強真がとあることから有名企業に入社した。しかしそのかわりに会社の野球チームで活躍しなければいけない。しかし強真には重い野球のトラウマをもっていた。それが理由でトラブルばっかの強真だがついに試合開始。強真はトラウマに打ち勝つことができるのか？、

まえがき（とばしてもかまいません）

どうも。どらぐーんと申します。

ここは別にとばしてプロローグから読んでもらっても全然かまいません

これを書き始めたのが中学3年でしかも冬休みでして、頭の中の数々のアイデアの中からこれを選びました。

いつかはほかのアイデアも書いていけたらいいなとおもっています。

卒業までには終わりまで書ききりたいとおもっています。

今回書いた「トラウマと四番バッター」はタイトルを考えるのにかなりの時間がかかりました。

なかなか、これだ！とおもえるタイトルが思いつかず五日くらい考えましたw

結局微妙でゆうかありがちなタイトルになっちゃいました。

初投稿のストーリーなんですけど、むちゃくちゃがんばってかいています！

書いては見直しの繰り返しでして、誤字や表現のミスやいろいろむずかしくて納得のいくまでかなり時間がかかっている状態なんです。

w。受験勉強と並行するとかかなりキツイですw

このサイトで自分の作品が書籍化されるのをめざしてがんばります！

まだ全部書ききっていないかもしれませんがどうか、

おうえんよろしくおねがいします！

ブローグ

「プロ野球選手」

それは男の子の大半が最初の夢としてねがったこと。

また、最初に絶対になわなない夢だと悟ったこと。

いわば男の子の人生で最初の壁である。

本当になれるのはほんの一握り。いや一つまみくらいの選ばれた人間だけである。

人の何十倍、何百倍練習しても容赦なく振り落とされるほどの絶大な壁。

その壁をスタボロになって登りきったほんのわずかな人間が見ることのできる世界。

谷重強^{たにじげつみさ}真はその壁を登りきることができなかった大勢の内の一人であつた。

大学まで野球一筋でやってきた。朝昼晩の練習を毎日やってきた。周りの人も認めるくらいの努力をしてきた。数えきれないほどの涙をのみ苦しさをバネにしてきた。

しかし、それでもそのはるかな頂^{いたadaki}にはとどかなかった。

まさに生きがいを失った強真だが今後の人生のため、いままでの自分にピリオドを打つために野球のことは忘れると心に誓った。

その後はまじめに勉強し朝昼晩が勉強に一筋だった。家族に樂をさせようと必死になり充実した日々を過ごしていた。資格もとった。

現在は大学も無事に卒業した。二十三歳。

職業は、、、

無職

第一章 1 リストラと友人

夢を見ていた。とても悪い夢。

何度もみる夢だ。いつまでたってもあの瞬間、出来事を忘れられない。

俺にとっては人生の分かれ道になった夢だ。あれのせいで一つの道がなくなっただともいえる。

絶対に忘れることのないトラウマ。

「ここは、どこだ。」

目が覚めたら見慣れない部屋のベットにはいつていた。

（ゆめかな？ いや、現実だ。）

「思い出せ。何があった？」

あれは確か昨日の朝、、

（昨日：午前10時）

「はあ。」

無意識にため息をもらしてしまう。なぜかって？簡単に言おう。バイトがクビになった。

今の自分の生命線ともいえる唯一の稼ぎ場所。その名も「焼肉屋ホームラン」。

特別うまい店ではないけど値段のわりにけっこうな量をたべれるこの辺では有名なお店。（時給780

そこで週五日、一日8時間くらい働いて食事も一食でるとゆうなかなかい仕事だった。

そこをたった五分前にクビになった。

理由を聞いてみるとお客様からの評判が悪かったらしく、なんでも三分おきにお冷^{ひや}について心配してくるのが正直ウザい。らしい。

自分ではそこを一番サービスピス精神でがんばっていたのでそれを聞いたときはけっこうショックだった。でも客観的に考えて自分でもたしかにウザいとおもった。

不覚だった。いまさらだがなんで気がつかなかったんだろう。後悔先にたたず、前もってよく考えるんだった。

「なにやってんだろーな俺は。せつかくみつけないバイトだったのに。バカだな、世界一バカな無職がここにいるぞ。」

こうやって自分を責める。そしてつぎは、

「てゆうか、なんで俺なの？もっとダメなやついたじゃん。おれ遅刻一回もしなかったじゃん。よく遅刻をしてはドジをやったやつがいたじゃん。つまみ食いしてたやつがいたじゃん。あいつらよりは俺のほうがマシだったじゃん。」

グチって他人を責める。最低だな俺は。

だがそう思っけても次から次へとグチがこぼれる。もうやだ、死にたい。酒でも飲もうかな？だめだ酒をかうお金がおれにはない。

いまは真冬の朝方。気温も心も冷めきっていた。

「、、おつ。」

そんなことを考えていたらさっきいったあいつらが前のほうからやってきた。うわ、きづかれたよ。

「「あれーツヨじゃーん！何してんのー？」」

ふむ、あいかわらず見事なハモリ。

手を振って近づいてくるそいつら（あいつら）は一人は背の高い顔が二枚目でハチミツのように甘い声をしたナイスガイ。もう一人は真冬のくせに汗だらだらで半袖で背の低いデブ。

前者の名は友田彰^{ともただあきひろ}。残りの名は太森和丸^{ふともりかずまる}と言っやつだ。

「今日は早上がりなんだよ。」

つよがってみた

「うそだね。」

速攻気づかれた、彰に。

「ツヨのことだから早上がりの許可が出ても、皿あります！、とかいって引かなそうだし、なにかあったの？相談のるよ？」

、、、ったく、なんでこいつは変に勘がいくせにだれでも予想つく所はわからねえのかな。

「そうだよ！僕たちは友達じゃないかあ。なんでも相談にのるよ。あ、そうだあ、チヨコたべるう？」

こいつもいいやつなんだよなあ。デブだけど。

「いや、チヨコはいいや。べつになんでもねーよ。」

こいつらは結構やさしいのと、天然があるのでにくめないんだよな。まあさつきにくみかけたけど。

だが今はそこが逆に痛い、苦しいこの状況である。

なぜに彰が遅刻がおおいのかとゆうと、はつきり言ってこいつはかなり トロい。決して悪気はないのだがカレンダーを読み間違えたり目覚ましの設定をミスったりする。

だから来なくてもいい日にきたり、むちゃくちゃ早く来てたりもする。はたまたドジも多くよく店でミスをしている。

しかしそうゆう所がだれにもくめず、てゆうか店長からもお客様からもかわいいと評判になっていまや店のアイドル的存在となっている。

和丸がつまみ食いをよくするのは、本人も無意識のうちにやってしまってるらしい。何度注意しても治ることのない問題点である。

「おまえらこそどうしたんだ、こんなところで。」

「いや、店長によばれてさあ。」

「和丸もか？」

「うん。そうだよ。」

きになるな。すごいきになる。

「遅刻しすぎてクビかも。ヤバイ。」

「おまえはないだろ。」

「うーん、僕もお、あぶないかなあ？」

「おまえはあるだろ。ふつうにあるだろ。」

「ぬうつ、なんだとお、ひどいじゃないかあ。もうチョコやんないぞお。」

「ひどいとは思わない。自業自得だとおもってる。」

「むううう。」

返す言葉がないようだ。口ごもっている。

「とりあえず、そのあとに集合しないか。」

「わかった。おわったらメールするね。」

「ばいばいだよお。」

和丸はブンブン手を振って汗をまきちらしながら、彰は軽くてをあげてその場を去って行った。

「とりあえずどこかで待つか。」

そんなこんなで、おれはとりあえず近くの喫茶店にはいっていくのだった。

そのあと起こりうる悲劇も知らずに、

第一章 2 マシュマロとおいうち

「死にてえ。」

俺は現在雪よけのために公園の屋根つきのベンチのしたで自動販売機で買ったコーンスープで手を温めつつスープをのどに通らして体をあたためていた。

ふしぎなものでスープで胸元はあたたまっても俺の心とサイフはちつともあたたまらない。まあ後者は言ってみただけだから気にしないでくれ。

とりあえず俺は今途方に暮れている状態なのだよ。

俺の体の中でコーンの粒の一粒一粒が俺をあたためようとせつせとがんばっているが俺の心はコーン達を笑いこけるかのように熱エネルギーを奪っていく。

「やばい。このままだと低体温症で死ぬかも。ごめん。やっぱ死にたくない、帰る。」

皆様さきほどは軽々しく死にたいとかほざいてすみませんでした。やっぱ命は尊いね。

「つたく、マジでついてないな今日は。今年一番の厄日やぐひかも。」

まだ二月の頭だと言っのにこんなこと言ってるじぶんがなさないぜ。でも本当にヤバイかも。ついてないってレベルじゃないぞ今

日は。

ああ。足取りがゆがんでいる。平衡感覚が機能していない。な
んでこんなにシヨック受けてんだろ、てゆーかシヨックすぎて何が
あったか忘れちゃった。

「なんだっけ、たしかあれは二時間、いや三時間だっけ？確か
それくらい前、」

そうして俺は帰り道、今日のできごとを思い出しながら帰ってっ
た。

～三時間前～

「、、、つたくおせーな。」

おれは喫茶店のなかでとくに冷めてるであろうコーヒーをちび
ちびすすっていた。カッコつけてブラックをたのんでみたけどやっ
ぱにがい。たのむんじゃなかった。

彰と和丸に送った約束メールから三十分。二人の姿はまだない。
メールも来ない。

「なにかあったのかな？」

いらぬ心配が脳裏をよぎる。

「まあ、どうせまたなにかドジってんだろっな。」

心配した時間じつに四秒。自己最長記録の二秒を更新した。

しかし和丸も遅い。やつにとっては珍しいことだ。

「しゃーない、メールすつか。」

おれはいまだに型落ちしたパカパカのケータイを恥じらいなく使っている。おれだってスマホがほしいよ。何が好きで十年前のやつ使っただよ。

きつといまもどこかでクスクス笑われているんだろうな。でもこれでもメール打ちやすかったり、使い勝手はいいんだから、大丈夫だ俺のケータイは。

何度目になるだろうこと考えながらおれは時代遅れの機械で文面をつづる。

「（今どこにいの？）っと。」

一斉送信。レトロな画面をとじて返信を待つ。そして俺はまた飲めやしないブラックコーヒーをちびちびとすするのであった。

待つこと三分。音質の悪い着メロの発生源をここえた手であやつる。確認。

「（喫茶店）って、メールでもハモるかあいつら。そしてなんで二人一緒にいるのにどっちからもメールがくるんだ。」

そうじゃないだとため息をつき返信。どこの？とか打つても長

引くから目的地だけを簡単につたえる。

「（おれがいった喫茶店はカフェ・イン・マウンテンだ。カフェ・イツ・満点じゃない。）っと。まったく、なぜにこいつらはこうなのかね。」

送信。ミルクで薄めすぎたもはやミルクのコーヒーをいっきにのどにながしこんで再び求人雑誌を手に取り待つ。まつこと十分。ようやくやつらがここにたどりついた。

「あつツヨ。まったくどこにいたんだよー。ずっとまつてたのに。」

「そうだよ。まつてたんだぞう。」

「ここにいたよ。おそらく和丸がむこうで満点イチゴジャム納豆サンドと満点ドリンクを頼む前から。」

「残念でしたあ。きょうはあ、満点チョコあんこアボカドサンドだもんねえ。」

まあそれはおいといて、本題に入る。

「それで、なんで店長に呼ばれたんだ。彰からどうぞ。」

「ああそうそう、きいてよ。さっきさあ、店長がいきなり俺をクビにしてさあ、」

おやこれは意外。こいつがクビになるとは。

「マジか。本当のことというと俺もクビになった。」

「ぼくもだよ。」

「予想どおりだ。」

「むううう。」

しかし三人一斉にクビにするってなかなかないよな。なにかあったのかな？

「フフフ。やっぱり。さっきそんなきがしたんだよね。」

「そうそう。だからこれからまたバイトさがさ、」

「ツヨもあの人にスカウトされたんだね！」

、、、は？

「おまえ今なんていった？」

「だから、ツヨもあの有名ホストの店長にスカウトされたんですよ！」

あれ？話がつかめない。

「さっきさあ、いきなりクビになったと思ったらさあ、知らないおねえさんができてさあ、あなたは明日、いや今この瞬間から私の店のメンバーよ。とか言われてさあ。」

、、、え？

「すごく混乱してたらさあ、おれがあのレストランの正社員になれるとかいわれてさあ、もうすぐにオーケーしてさあ、明日から来なさいっていわれてさあ、もうほんとに舞い上がったちゃってさあ。」

あれ、どうゆうことだろうか、頭の中がふわふわだ。マシユマロみたい。

「しかもまたツヨと一緒になんて、ほんとに奇跡だよね！」

「いや、ちよつとまで。」

「ん？どしたの。」

「いや、その。」

これはいつとかねば。

「じつは、おれはおまえとは違う感じで、その、なんとゆうか。」

「え。お店違うの？」

いやそうゆうわけじゃないが、

「まあ、そ、そんな感じかな？」

むちゃくちゃ苦しいうそをつく。

「そう、そつか、すごい残念。」

あからさまに彰のテンションがさがった。うつ、むっちゃ苦しいぜ。

「フッフッフ。」

ここにきてなぜか和丸が不気味に笑う。

「なんだよおまえ、感じわりーぞ。」

「いやあ、彰君にはわるいけどお、ぼくもお、また強真君といっしょでうれしいんだよお。」

、、、はえ？

「じゃ、じゃあおまえもスカウトか？」

「うん。そうだよ。」

嘘だ。信じないぞ。信じてたまるか。

「さっき、テレビ局のひとからあ、グルメリポーターやらないかあつてえ、さそわれたんだあ。」

「嘘だろ。どうせ。な？」

「いやほんとだよ。さっき僕も見た。」

信じたくない。大変信じたくないが、、どうも本当らしい。たしかにピッタリな気もする。

「そ、そうか。よかったじゃないか。で、でもそこも違うつて言うか。」

「そ、そうなお。残念だなあ。」

「じゃあ、みんなバラバラ？」

たしかにバラバラだ。いろんな意味で。

「そうみたいだよ。でも！僕らの友情は永遠にちぎれないくさりだよ！きつと、どこかでまたいつしよだよ！」

俺を除いた二人だけの会話がはずんでいる。俺はというと頭も視界もマシユマロパーティー！

「うん、分かった。じゃあこれからはみんなお互いにがんばろうね！」

「がんばるんだよう!」

わーいマシユマロがいつぱいだあ。あははは。

「じゃあまたどこかで!心の友よ!」

ジャ○アンか。

心の中でツツコミをいれていた二人はカランコロンとドアをならしてその場を去った。

その場に一人とり残されたおれはとりあえずふかくため息をつく。

「はああああうううああああああ。」

なんで俺にばっか不幸があつて、あいつはいいことばっかなんだろ。バイト中でもあきらかに給料がちがったし、俺がミスすると客の目はこわくて、彰がミスすると客はゆるしてたし。

和丸は俺以上におこられていたのに。

ほんと人生は不公平だと実感するぜ。

なぜかマシユマロの味しかしねえ二杯めのコーヒーを飲み干しておぼつかない足取りで会計をすませるために動こうとおもったら近くの女子校生の会話が耳にはいった。

「さっきのあのカッコイイ人、あのクラブにいくんだって!」

「ええーマジィ!ヤッバ、むっちゃテンションあがるんですケド!」

「ねえ！こんどいこうよ！」

「いくいく！ぜったいいく！週七日いく！」

まいにちじゃねえか。

「あと、よくあの人を採用するところあつたよねえ。」

俺のことかそれは？

「ねえ。むっちゃうけるんですケド！」

「よほど曲者ぞろいなんだろうねその店！」

、、、、

「もしかしてゲイバーじゃない！」

「それぞれ！絶対そうだって！」

「キモー！」

、、、、さんざんいつてくれるじゃねえかあオイ。

俺はそこの女子二人をにらみつける。

「うつわ。こつちみてるよ。」

「キッモーイ！」

「きつと女に飢えていてわたしたちねらってんじゃない！」

「うつわサイテー！」

やべえ、殴っちまいそうだぜ。

「ああゆう人は結局社会の歯車にくみこめずに人知れず死んでい

くんだろうねー。」

「ねー。」

、、、 あっれ？怒りをこえて悲しみがこみあげてきた。やばい泣きそう。

せめて聞こえないようにしゃべってくれればいいのに。残酷にもわざわざきこえるようにしゃべっている。わざとかな？ともおもえてえきた。

おれは会計をすませ店をでていった。俺の精神面をズタズタにしたこのみせはもう二度とくるまいと心に誓った、、、

思い出してしまった。頭から足の先まで鮮明に思い出してしまった。思い出すんじゃないかと今になって思う。

コーンポタージュもいまやマシユマ口味の液体と化した。飲む気失せた。

「思い出すんじゃないかった。」

心の底からそう思う。だが時すでに遅し。あの一部始終を再インストールされた。

これからどうしようか。身も心もマシユマ口と化した今何もやる気がおこらない。

とりあえず歩こう。上を向いて歩こう。そう上を向くんだ俺。いかなる時でも上を向いてあるければ、

ピチャッ

「、、、、、、、、」

断言できる。今年一番の厄日だ。

生き物すべてが俺を見放しているように思える。鳥までもが、

ピチャ

「、、、、、、、、」

何も考えるな。無心になれ。絶対に動じない不動の心を、

ピチャ

「しつけえぞオイ！」

もういい。何もかも失せた。あのマシユマロさえも失せた。

俺の両目と鼻に同じ物体が落ちてきた。うわ、くっせ。

もういい。何も望まない。

「死のう。」

近くに大きい川がある。そこにまっしぐらだ。

鳥のフンをぬぐっておれは一直線にかわにむかった。

途中何度も笑われたが気にしない。数分後には忘れることだ。

第一章 3 救済と出会い

、、、、

着いた。

この辺では地味な川だしかけっこう大きい。

程よく静かだ。橋の上に女の子が一人。

では早速取りかかろう。まずは橋の真ん中にいこう。

怖がる前にスタスタと歩く。着いた。女の子のすぐそばだった。

この子おどろくかな？ いや関係ない。とりあえず準備を、、、、
って、あれ？

女の子の様子がおかしい。まっすぐな目で川をみている。それだけ、、、、

なにか変だ。どうしたんだろう。いや、

俺は我にかえり死ぬ準備をととのえた。

そしたらつぎの瞬間。

ザッパーーーン！

[illegible]

女の子が川に勢いよくダイブした。

「!、やべえ、助けないと!」

ほぼ無意識におれは川に飛び込んだ。

ザッパーン

「つぶは！ つ、冷てえ！」

幸い流れがそこまで速くないので泳げば追いつくが水温が低すぎる。

「はやくしねえよ。」

さっきまでの自殺願望はもうどこにもなかった。

ただ女の子をたすけたかった。

「もう、ちよい！」

あと距離は2メートルくらい。

「とどいた！」

女の子はぐったりしている。意識もない。

俺は女の子を抱えてなるべくはやく岸におよいだ。

なんとか岸についた俺はまず女の子の様子をつかがう。結構やばそうだ、みずを飲んでいるかもしれない。

「おい！大丈夫か！」

叫んでみるも返事はない。軽くたたいても反応を見せない。

「くそ！」

（状況が状況だ。しかたがない。）

俺は女の子の口に口をつける。

そのあと強く息を送る。

そして胸をなんども強く押す。

（恥ずかしいことじゃないぞ。おいしいとか思っ
てないぞ。）

そう自分に言い聞かせながらなんども繰り返す。

そしたら。

「つぶつはあ！」

（よし、息を吹き返した！）

「ゲホッゲホッゲッホ！」

「大丈夫か！？」

「うん。」

意識はもどったがまだぐったりしているようだ。

（とりあえず救急車を。）

「げっ。」

ケータイがこわれている。あいにく防水じゃなかったらしい。

（まじかよ。どうしよっかな。）

まわりには誰もいない。

「はっ！」

ムクッ

「うわ、びつくりした！」

女の子がおきた。何があったのかと呆然としているように見えた。

（っうわ！）

その子は小柄だがいいスタイルをしていて整った顔をしていた。

（やべえ、すげえかわいい。）

俺は少しの間みとれていた。

「く、く、く、つ！」

「き、気がついたか？」

「ここはだれ！？あたしはどこ！？」

（相当混乱しているみたいだ。まあむりもないか。）

「と、とりあえず落ち着こう。」

「ほえ！？あんただれ！？」

「川に落ちた君を助けたひとだ！」

「なにしてくれんのよ！」

ゴッ

「ぐはあ！なにすんだ！」

おもつくそほっぺをなぐられた。かなり痛い。

「せつかく死のうと思ってたのに！」

「自殺はいけません！」

「子供扱いすんな！」

ゴッ

「ぐはあ！いつてーな！」

二発目。気性はかなり荒いみたいだ。

「じゃああんたは何しようとしてたの！」

「なにつて、いわれても、」

「自殺でしょ！そうでしょ！どーりでそんな死んだ目をしてるわ！何邪魔してんのよ！」

「じ、自殺じゃねーよ！」

「だってらなんなのよ！」

「じ、自殺以外だよ！」

ゴッ

「寝言は寝て言え！」

三発目。全部おなじとこ。

「ちつくしょ！さっきから聞いてりゃいい気になりやがって！」

「もういい！死ぬ気失せた！帰る。」

彼女は怒り狂った様子で180°方向転換した。本当に帰るよう
だ。

「ちょ、まちやがれ！」

「なによ！」

「いや、その。」

「意味分かんない！」

「もう自殺とかすんじゃねーぞ！」

「っ！大きなお世話よ！」

彼女は一瞬だが悲しい顔をしていたと思う。

「家族が悲しむぞ！」

「っ！あんたに何がわかるのよ！」

「なにもわからねえ！」

「いみわかん、はっぶえツクシヨイ！」

盛大なくしゃみをした。

「だ、大丈夫か？顔鼻水だらけだぞ。」

「うつさい！帰る！」

彼女は何のためらいもなく手で鼻をぬぐった。お前女か？

「まてよ！」

俺は彼女を追った。

「ついてくんない！このストーカー！」

「ついてかなかったらまた自殺するだろうが！」

「うつさい！おおきなおせ、」

また殴られるとおもったらなぜか、

「いいわよ。」

「なにその急激な心変わり！？」

彼女は何かを思いついたようだった。にやにや笑っている。しかし、俺はその時は気がつかなかった。

「気が変わったのよ。ついておいで。」

「わけわかんねえ！」

「来るの、来ないの！」

「いくよ！」

「じゃあいきましょう。」

（なんなんだまったく！）

そんなこんなで俺は彼女について行つた。

これが俺と彼女のこれからおこるさまざまなことの始まりだつた。

第一章 完 泥棒とチーム入団

現在、俺は助けた女の子と一緒に彼女の家にいるところだ。

「あんた名前は？」

「お、おれか！？」

「ほかにだれがいんの！？」

「いや、いきなりでびっくりした。俺は谷重強真だ。おまえは？」

「おしえなーい。」

「ふざけんな！」

なんなのだこいつは。

「うつさいなあまったく。」

「だれのせいだ！」

「私は田中花子よ。」

（うそつけ！？）

「むうう、そうか。いくつだ？」

「23歳。」

「嘘だ！」

ゴッ

「ぶっ殺すわよ！」

四発目。また同じとこだった。すこし血がにじんできた。

彼女は見た目と年のギャップにコンプレックスを感じていたらしい。
い。

「わ、悪い。何月生まれだ？」

「四月。」

「まさかの年上!？」

「え、あんた年下なの!？」

「23歳、六月生まれだ。」

「へー以外。」

ドンッ

「キャッ!」

花子が尻もちをついた。なにかぶつかったみたいだ。

「大丈夫か!？」

「なにすんだコラア!」

「お、おいおい。」

ほんとに女がお前？

後ろから男がぶつかってきたらしい。そのうしろから、

「たすけてー泥棒よー!」

すごい急展開。

「なに！あいつか。」

なぜか俺は冷静だった。その辺のいしをてにとる。

「あんた、それでなににする、」

「くらえ！」

ブン！と俺が投げた石は、

「なに！？ぐはあ！」

泥棒の頭に見事命中。泥棒は倒れこんだ。

どうやら気絶したようだ。うごかない。

後ろからおばさんが近づいてくる。そうとう走ったようだ、息が上がっている。

「あ、あんた、はあ、あり、ありがと、ね。はあ、」

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがと、う。はあ、これ、お礼ね。」

野口英夫を一人もらった。

「はあ、ありがとうございます。」

「じゃ、じゃあ、ね。」

おばさんはその場を去って行った。

「（なかなかの肩ね。）」

花子は何かを考え込んでいたようにみえた。

「ん？どした？」

「いや、なんでもないわ。」

「そうか。じゃあいこ、こ、こ、」

「助けてー！泥棒よー！」

「またかよ！？」

「またみたいね。」

どうやらまたらしい。

（くそ！いしがねえ！）

もう周りにはいしはない。俺がとつた行動は、

「まちやがれ！」

走った。

「あんた、走って追いつく距離じゃ、」

「ここでまってる！」

「ちょ、ちよつと！」

（あそこか！この距離なら追いつく！）

俺は走った。けっこう距離はあったが以外とすぐに追いついた。

「まちやがれ！」

「ひい！なんだおまえ！」

「つかまえたぞ！」

「ぐはああ！」

ドサツ！

思い切り押し倒してやった。そしたら気絶したみたいだ。動きがない。

おばさんが近づいてくる。やっぱり息が上がっている。

「あ、あんた、はあ、あり、ありがと、ね。はあ、」

「大丈夫ですか？」

「うん、ありがと、う。はあ、これ、お礼ね。」

野口英夫がまた一枚。

「はあ、ありがとうございます。」

「じゃ、じゃあ、ね。」

おばさんはその場を去って行った。

「、、、戻るか。」

俺は二人の英夫を濡れてないポケットにしまい花子のところへ行った。

花子はその場を動いてなかった。

「じゃ、いくか。」

「（なかなかの足ね。）」

花子はまた考え込んでいた。

「どした？」

「なんでもないわ。」

「そうか。じゃあいこ、ゝ、ゝ、」

「助けてー！泥棒よー！」

まだだ。後ろから走ってくる音がきこえる。

「てめーら！そこをどけ！ぶち殺すぞ！」

「しつけええええ！」

ゴキヤッ

「ぐっはあ！」

振り返りざまになぐってやった。

「す、すごい音したわよ。」

花子があぜんとしている。

泥棒は気絶している。てゆーかさした。

おばさんが近づいてくる。息は上がっている。

「あ、あんた、はあ、あり、ありがと、ね。はあ、
「大丈夫ですか？」

「うん、ありがと、う。はあ、これ、お礼ね。」

三人目だった。おばさんも野口英夫も。

「、、、ありがとうございます。」

「じゃ、じゃあ、ね。」

おばさんはその場を去って行った。

「つたく、もうないよな。」

「（力もあるわね。）」「

「どした？さっきから。」

「ねえあんた！」

「おう！？」

花子がずっとよってきた。いい香りがした。

「スポーツとかやってた！？」

「、、、ま、まあ一応。」

「なにを！？」

「、、、野球を。」

（なんなんだよ。）

「（やった！ビンゴ。）」

「、、それがどした？」

「あなた無職でしょ！？」

「！っ、な、なんでわかった？」

「自殺しようとしたじゃない。」

「ああ無職だ！」

開き直った。

「うるさい！」

怒られた。

「すまん、、」

「あんた仕事ほしい！？」

「むっちゃんほしい！」

（当たり前だ。そんなこと。）

「じゃあさあ。」

「どした？さっきから。」

「うちの会社来ない！？」

「、、は？」

言ってる意味がわからない。

「あなたにぴったりのしごとがあるわ！」

、、、、え？

「いやだから、あなたにぴったりのしごとがあるわ！」

「マジか!？」

「マジよ！私が紹介してあげる。助けてくれたお礼に。」

「そんなことできるの!？」

「いいコネがあるのよ。ついてらっしゃい！」

「おう！わかった！」

（まじかよ！こんなことってあんだ！不幸が続いたもんな！厄日なんかじゃなかった！）

俺は何も考えずに花子についていった。もう少し疑えばよかったと思う。ついに行った所は結構ビルが多いところだ。そのひとつの十階建てくらいのビルに入って行った。

藤木原スポーツと書いていた。

「ここって、あの。」

「そうよ。世界の藤木原スポーツよ。」

藤木原スポーツとは、世界的に有名なスポーツ用品メーカーだ。野球から剣道まで幅広く作っている。

「こんな濡れたままの格好で大丈夫か？」

「大丈夫よ。問題ないわ。ここでまってて。」

そういつて花子はカウンターに行きその人となにかしゃべっている。カウンターの人がすごいペコペコしてるのをみるとかなり強いコネらしい。

待つこと数分。

「ついてきて。」

エレベーターまでよんでいる。とりあえずついていくとしよう。

おれと花子がエレベーターに乗ると花子が最上階のボタンをおした。

「なあ。」

「なに？」

俺はさっきから聞いたかったことを聞く。

「いったいどんなしことをするんだ？」

「それは言うてからのお楽しみ。」

「むう。」

ついた。

なかなか清潔的なビルだ。ホコリひとつない。

エレベーターを出てすぐの部屋に行くらしい。社長室と書いてある。

「ここよ。」

花子に扉を開けてもらい中に入る。かなり大きな部屋だ。まさに社長室って感じ。

中太りの社長らしきひとがソファに座っている。

「おお香織。よくきた。」

、、（え、香織？）

「連れてきたわよ父さん。」

（花子、どうゆうことだ？）

おれは目で訴える。

「（あとで話すわ。）」

（なんだよそれ、）

不安が頭をよぎる。

「この子かい、香織が目を付けた子は。」

「そうよ。」

「貧乏くさい子じゃのう。」

カチンときた。

「でも腕は確かよ。」

「そうか。お前名前は？」

「は、はい。谷重強真といいます！」

「そう硬くならんでいい。」

「は、はあ。」

けっこう気さくな人そうだった。

「ここで仕事をしたいかい？」

「はい！もちろんです！」

「わが社に尽くすかい？」

「はい！」

「そうか。じゃあ、明日から来なさい。」

「は、はい！ありがとうございます！」

（こんなすんなりいくものなのかな？）

そのとき舞い上がった俺は疑いなど感じなかった。

どうやらさつき感じた不安は的中したみたいだ。社長が言った言葉は、

「君は今から、わが社の野球チームのひとりじゃ！」

「、、、、、、はい？」

（は？野球？どうゆうことだ？）

おれは今日一番混乱していた。

「明日から練習に励むように！」

「え、ちょ、ま」

「では、明日からがんばってくれたまえ！」
「え。」

「では下がちなさい。」

話は終わった。退室命令がだされた。

「え、ええええええええええ！」

「はいはい、いくわよー。」

「ちょ、花子まで！」

「いいから行くの！話はあとよ。」

花子？に連れられて俺は部屋をでた。

俺は花子？を連れて外に出る。

言いたいことはひとつ。

「ちょっと説明してもらおうじゃねーか！」

「私の名前は藤木原香織^{ふじきはらかおり}。ここの社長の娘。あなたの仕事はここの野球チームの一員になって試合に出ること。」

「ぐっ！」

聞こうとしてたこと全部言われた。

「あたしはそのマネージャーよ。明日からむかえにいくわ。」
「ちよつとまで！」

「えい。」

「ぐ！」

なにかを首もとにやられた。

「な、なにした！？」

「おやすみー。またあしたねー。」

「ま、て。」

眠くなっていく。どうやら今、睡眠薬を盛られたみたいだ。

「ち、ちくしょ、う。」

バタッ

俺はその場に倒れこんだ。黒服のごつい二人がおれをどこかにはこんでいる。

「ま、ち、や、が、れ、れ、」

薄れていく意識の中俺はやはり今年一番の厄日だと確信した。

第二章 1 目覚めと質問

思い出した。

思い出すんじゃないかった。昨日からそればっかだ。

あのあと俺は気絶した後、この部屋に連れてかれたみたいだ。

ちなみにSFのような真っ白な部屋でベッドに縛り付けられてるわけじゃなくて普通の部屋だ。大体六畳くらいの部屋で、ベットと机といすが一個ずつある。それだけ。

「、、、、気分わりい。」

あの夢を見た後はいつも大きな脱力感と軽い吐き気がする。それに加えてむりやり寝かされて気分が悪い。

「、、、あら、おきたようね。」

俺は声のするほうに頭を傾けた。いつの間にか香織が部屋にいた。

「ここはどこだ。」

俺は単刀直入に聞いた。

「へえ、意外と冷静なのね。」

「今はおこるきにならないんだ。」

「顔色悪いわよ。大丈夫かしら。」

「大丈夫じゃない。」

香織はふーんとあいずちをうつていすに座った。そしていたって普通にしゃべりだす。

「ここはうちの野球チームの寮よ。」
「ふーん。」

俺は冷静だった。それにたいして香織がすこしつまらないようだった。

「驚かないのね。」
「予想ついてたからな。」
「そう、まあいいわ。」

全然よくない。

「質問してもいいか？」

俺は普通に問いだした。

「みつつまでよ。」

そうか。ではさっそく。

「俺はこの会社で働くといったよな。」
「一つ目ね。いったわ。勿体ない事に使ったわね。」

（しまった。確認のつもりだったのに。）

「なぜに俺は野球チームに入っているんだ？」

「二つ目ね。あなたの仕事はこの会社で組織している野球チームの一員としてプレーしてもらっわ。その際に自社製の道具を使ってもらってデータを取ることでよ。あなたの野球のセンスをみてここにふさわしいと思い、私からスカウトさせてもらったってわけ。」

隅々までキツチリと教えてくれた。

「ご丁寧にも。」

「どういたしまして。あと一つね。」

俺はすでに言うことを決めていた。それは、

「今すぐにやめたいんだが。」

「だめよ。」

即答だった。

「なんでだ？」

「私が困るから。」

「それだけか？」

「もちろんチームとしても、会社としても大打撃よ。」

嘘をつくな。

「とってつけたような言い方だな。」

「そうかしら。」

そうだとも。

「俺はすごく野球をしたくないんだが。」

「なぜかしら。」

「それは言いたくない。」

「トラウマがあるからでしょ。」

「、、、、、、」

なんでわかったんだ。こいつ。

いやまぐれかもしれないからな。きつとそうだ。

「なんでそう思うんだ。」

「第一章で言ってたじゃない。」

「オイ、それはNGだ。」

「だいたい、知ってて聞きたくないのよね私。」

「少なくとも小説上のマナーは守れ。」

「分かったわよ。」

とゆうわけで、テイク2。

「なんでそう思うんだ。」

「うーん、何となくかな？」

超能力者かおまえは。

「凶星なの？」

「決して違う。」

「あらあそうなの。」

ニタニタ笑いやがって。

「違っって言ってるだろ。」

「あら、どうしたのムキになっちゃって。」

この女、Sだな。

「なんでもねえよ。」

「そう、ならいいの。まあそれは置いて。」

香織は背中から大きいボストンバッグを取り出した。どこにあったんだ？

「あなたには今から野球の練習にいつてもらうわ。」

「断るといったら？」

「殺すわよ。」

香織は背中から拳銃を取り出した。お前の背中には四次元ポケットか。

モデルガンだと思いが雰囲気てきに本物にも見えて俺は本能的に警戒してしまう。

「ついてきてもらうわ。」

「、、、、」

（断らないほうがいい気がするな。命的にも。）

香織は俺が了解したように思ったのかバッグを押し付けてくる。俺はしぶしぶ受け取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2186ba/>

トラウマと四番バッター

2012年1月14日23時50分発行